

平成 25 年 7 月 5 日

板垣、大隈、伊藤の政治指導の特質

議会政治の基礎をつくるために功労のあった板垣退助（1837－1919）、大隈重信（1838－1922）、伊藤博文（1841－1909）について、その政治指導の特質の一面につき岡義武著『近代日本の政治家』を参考として論じたい。

板垣は、「自己の信条・主張を頑守する余りにひとに対してとかく寛容を欠いた」（77 頁）とされているが、明治 6 年の征韓論争の際の岩倉らの行為に憤激して西郷らと下野したこと、家屋敷などの私財を擲って自由民権運動に身を投じたこと、授爵の勅を二度断ったが 1887 年に三度目にしてやむなく伯爵を授爵したため、衆議院議員の被選挙権がなくなり、貴族院の勅選議員の任命も辞退したため帝国議会に議席をもつことがなかったことなどにうかがえる。

大隈は、臨機応変主義、場当たり主義といわれるが、それはときとして慎重な配意を欠いて、軽率無思慮な行動となった（74－75 頁）。これは多分に薩長両藩が巨大な勢力を擁する中で肥前藩出身の大隈としては問題の応急迅速な処理を求められていた上でのことであろう。

伊藤は、外交に関しては極めて慎重であり、幕末以来西洋諸大国の重圧の下において国の独立を名実ともに防衛しようと苦心焦慮した一方、内政においては強い抵抗を予想した場合には妥協的態度で臨み、抵抗が弱いと判断した場合には強い態度に出た（30－36 頁）。

このことはいずれも政治家の政治指導の特質が歴史的背景に強く制約されていることを示しているよい例である。政治家は自身がおかれた状況の下で有利な情勢を築くために、情報を正確に把握し、的確な施策を判断し、実行していくのであり、採り得る行動の幅は限られたものである。そのような時どきの行動が積み重ねられて、政治指導の特質として現れてくるのであり、もって生まれた性格や能力と複雑に絡み合って形成される。この3人の議会史における努力の足跡を顧みると国会議事堂の中央広間に銅像として飾られていることは決して偶然ではない。